

2021年10月2日(土)／とうほう・みんなの文化センター(福島県文化センター)大ホール

## 地域社会をつなぐ社会貢献

2021年度の社会貢献フォーラムは、「地域社会をつなぐ社会貢献」をテーマに福島市で開催された。東日本大震災から10年が経過し、震災によって損なわれてしまった地域コミュニティを再び甦らせる取り組みや地域社会における社会貢献のあり方などについて、約270名の参加者を前に、未来を見据えた意見が交わされた。第1部では、原発事故により被災地に残されたウシの物語『フクシマのウシ』をコーディネーター役の村松真貴子さんが朗読した後で、物語の作者の芥川麻実子さんから震災直後の被害状況や支援活動についての報告があった。第2部では、震災後の地域コミュニティの再建をテーマに、被災地である福島県を拠点にそれぞれの活動を行っているパネリストによるディスカッションが行われた。なお、当日は、検温・手指消毒、ソーシャルディスタンスなどの新型コロナウイルス感染防止対策が徹底されたうえでの開催となった。

### 主催：

一般社団法人パチンコ・パチスロ社会貢献機構、福島民報社、福島民友新聞社、全国地方新聞社連合会

### 後援：

福島県、福島県教育委員会、福島県町村会、福島県社会福祉協議会、福島県商工会議所連合会、福島県商工会連合会、福島市、福島市教育委員会、福島テレビ、福島中央テレビ、福島放送、テレビユー福島、ラジオ福島、ふくしまFM、福島コミュニティ放送FMポコ、共同通信社、福島リビング新聞社、国立大学法人福島大学、全日本遊技事業協同組合連合会、福島県遊技業協同組合連合会



第1部 トークショー

『フクシマのウシ』朗読

作・トーク／芥川麻実子さん(道の駅「八王子滝山」名誉館長／道路環境プランナー)  
朗読／村松真貴子さん(アナウンサー／エッセイスト)

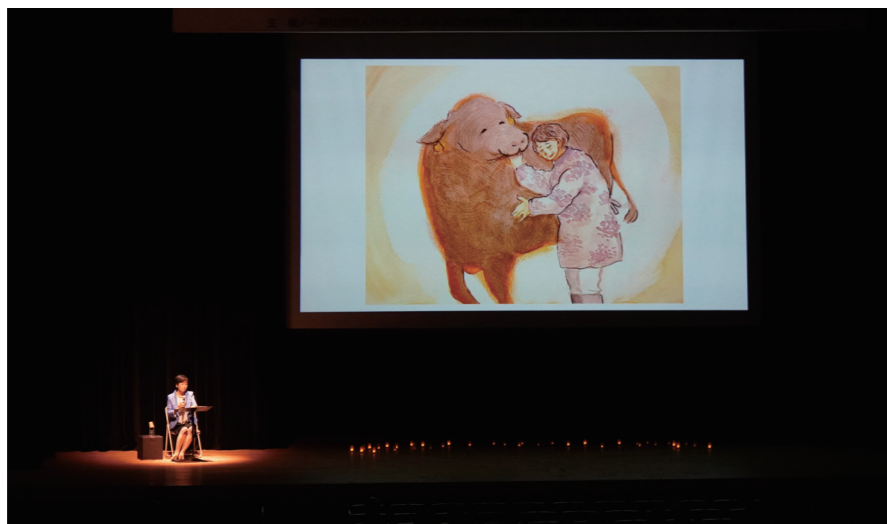
**芥川さん** 東日本大震災後に生産者の方々とお話をする機会があり、福島の方々が牛舎につないだまま置いていかざるを得なかったウシがかけた柱の写真を見せられました。そのときに、これは本当に可哀想なことだと思ったこと、震災で揺れが激しかったときに、私が飼っていた犬がそれまで上れなかった階段を上ってきて、「お母さん、大丈夫?」と言わんばかりに私を見つめる目を見たときに、人も動物も一人では生きてはいけないという命の通い合いのようなものを感じて、このウシの物語を書こうと思いつきました。

震災後、道の駅として何かできることはないかと考え、3・11の本当の姿を知ってもらうため、9月の防災週間に写真展の開催を企画し、2011年の夏に、その取材のために東北を回りました。仙台にある国土交通省東北地方整備局では、局長さんにお話をうかがいました。震災直後、整

備局では防災ヘリなどから届く情報をもとに、緊急輸送道路を確保するため、国道4号線から太平洋沿岸部へ15ルートを切り開く「くしの歯作戦」を策定。瓦礫を取り除く過程で出てくるご遺体を収容しながらの大変な作戦だったそうです。

宮城県亘理郡山元町にある中浜小学校では、津波到達予想時間まで約10分しかないなか、避難先の高台への避難は間に合わないと判断した当時の校長先生が、とっさの判断で児童、職員、保護者を学校の倉庫2階の屋根裏部屋に誘導。すぐ階下まで押し寄せる津波の浸水に一晚、耐え、翌日、90名全員が奇跡的にヘリコプターに救助されました。この小学校はその後、改装され、宮城県南部唯一の震災遺構となっています。

岩手県の内陸部にある遠野市は、花崗岩の安定した地盤上に町があることから、30年以内に99%の確率で起



出席者プロフィール



村松真貴子さん  
アナウンサー／エッセイスト

SBS静岡放送にアナウンサーとして勤務し、キャスターを2年間務める。以後、東京に戻りNHKの番組を担当する。現在は全国で講演会をする傍ら、子どもたちに、朗読を通して本の面白さや、発生・話し方の指導も手掛けている。全国公民館協会理事、国分寺市教育委員会委員。



芥川麻実子さん  
道の駅「八王子滝山」名誉館長／道路環境プランナー

『フクシマのウシ』作者。芥川龍之介の孫。TBS『モーニングジャンボ』、文化放送「おはよう日本列島」などの司会やアシスタント、ディスクジョッキーを担当。のち交通評論家に転じ、首都高速道路の広報活動などを手掛けた。財団法人首都高速道路協会元理事。



菊地芳朗さん  
福島大学  
うつくしまふくしま未来支援センター長

東北大学大学院文学研究科(博士課程前期)修了後、福島県立博物館学芸員として勤務。2003年福島大学行政社会学部(現:行政政策学類)助教授に就任。2012年に教授となる。うつくしまふくしま未来支援センター設立後は、被災文化財の救出・記録活動などを行ってきた。2020年4月より現職。

きるとされていた宮城県沖地震の後方支援拠点としての構想を立て、2008年秋に東北6県の自衛隊、警察、消防、自治体関係者などを集めた大規模な演習を行いました。その2年半後に東日本大震災が起きました。発災から11時間後、一人の男性が遠野市災害対策本部に駆け込んできて、沿岸部の大槌高校に500人が避難しているという情報とともに、山道なら通れるという情報をもたらしてくれました。翌早朝、消防職員が救援物資を積み込んで大槌町に出発したのが、遠野市の後方支援の始まりでした。

福島県南相馬にある道の駅は、福島第一原発から30km圏内にあり、スタッフ全員が避難したなか、駅長さんがたった一人残り、救助に向かう自衛隊、警察、消防などの中継地として機能し続けました。駅長さんはとにかく毎日、朝から晩まで、トイレ掃除に明け暮れたと言います。

そうした取材をまとめ、2011年8月から9月にかけて、



八王子滝山の道の駅で「あれから5ヵ月 被災地にて」という写真展を行いました。それから10年間、私は被災地に残された方々の心を救いたい、みんなを笑顔にしたいという気持ちから様々なイベントを企画して、被災地に通い続けています。

第2部 パネルディスカッション

3・11から10年－地域社会をつなぐ社会貢献－

パネリスト／芥川麻実子さん、菊地芳朗さん(福島大学 うつくしまふくしま未来支援センター センター長)、青木淑子さん(富岡町3・11を語る会代表)、諸田英模さん(福島県遊技業協同組合連合会理事長)、コーディネーター／村松真貴子さん

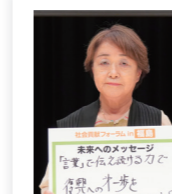
**村松さん** 復興という観点から、この10年を一言で表すと、どんな言葉になるかをパネリストのみなさんに考えていただきました。

**菊地さん** 私が選んだのは、「風化を防ぐ」です。10年経つなかで、震災や原発事故の記憶を風化させることなく未来へつなげていくことが、大学の人間としての私に課せられた仕事ではないかと思っています。

**青木さん** 私自身の人生を数直線として見ると、この10年間は「崩壊と創生の間」に感じています。いろいろ

なものなくなり、いろいろなものが失われました。それをこれから新しく生み出していかなければならない。でも、まだ、その狭間にいると、10年経っても感じています。

**諸田さん** 私自身は、「ようやく復興の芽が出た」と感じています。この10年を振り返ると、復旧という土壌を作り、復興という種をまき、ようやくその芽が出始めてきたのかなと思います。一つ一つの復興事業などがこれから一つになっていくことで、より大きな復興という次のテーマになっていくのではないかと感じています。



青木淑子さん  
富岡町3・11を語る会代表

1970年から2004年まで福島県内県立高校国語科教員・演劇部顧問。2004年～2008年富岡高校校長、福島県高等学校演劇連盟会長。2012年4月～2015年富岡町社会福祉協議会アドバイザー、「富岡町3・11を語る会」代表。富岡高校長時代、町との深い連携、町民と関わりがあり、震災後の被災者支援をライフワークとしている。



諸田英模さん  
福島県遊技業協同組合連合会理事長

株式会社ニラク取締役。全日本遊技事業協同組合連合会理事。福島県暴力追放運動推進センター理事。福島県遊技業協同組合連合会理事長。福島県中央遊技業協同組合理事長。2011年の東日本大震災を経験し、地域社会での存在意義は何かという命題に取り組み、最近では福島県および福島県警察本部と災害時における支援協力協定を結ぶなど様々な社会貢献活動を推進。

**芥川さん** 私が10年間でできたことは、「心に笑顔を取り戻す」ということしかありません。お友だちも被災地でたくさんできました。温かい言葉も現地でもたくさんかけていただきました。みなさんが笑顔を取り戻しつつあります。これからも、そのお役に立ちたいと思っています。

**村松さん** 私は、「心配・気がかり」の一語に尽きます。この10年間、原発に関わることを含め、福島に関するニュースがたくさん流れました。そうしたニュースに接するたび、本当に気がかりで、心配でした。でも、今すぐ解決できる問題ではないので、やはり心元気に、前に向かっていくしかないのかなと思っています。では、それぞれのお立場で、この10年、どんな活動に具体的に取り組んできたのか、お話をうかがいたと思います。

**菊地さん** 福島大学の「うつくしまふくしま未来支援センター」は、地元の国立大学として科学的な調査・研究とともに、被災地の推移を見通し、復旧・復興を支援することを目的に、現在、子ども支援、地域復興支援、企画・コーディネート、相双地域支援サテライトの活動を行っています。また、「福島大学災害ボランティアセンター」という学生団体があり、生活復興支援活動やコミュニティづくり、子ども

たちへの寄り添い活動などを行っています。地元の大学として何ができるかを考え、学生という大きなエネルギーを活かしながら活動することを常に考えています。

**青木さん** 「富岡町3・11を語る会」は、地震・津波、原発事故という複合災害に遭った福島県双葉郡富岡町の町民たちが、この出来事を「語り人」として伝承し続けることを通して、町のコミュニティ再構築を目指して活動しているNPO法人です。主な取り組みとして、語り人活動の充実と拡大、とみおか表現塾の開設、演劇キャンプin富岡の開催、動画制作と映画作り教室、世代間交流会などを行っています。一人が語る言葉が、ともに考え、ともに動く人を作っていく、それこそが復興の原動力だと信じて活動を続けています。

**諸田さん** 福島県遊技業協同組合連合会では、業界の発展と健全化を目的とした活動のほか、地域との共生を理念として、防犯、暴力団対応、交通安全、社会福祉、青少年育成など、様々な社会貢献活動に取り組んでおります。東日本大震災から10年が経ちますが、県内では未だ帰宅困難地域があるほか、県内外へ避難されている方々がいらっしやいます。私どもは業界の特性を踏まえ、災害

時に県民、地域住民の皆様の安全・安心を少しでも確保して、できる限り被害を小さくするために、組合加盟142ホールすべてで駐車場を一時避難所や警察・消防・自衛隊などの救助活動の拠点として提供したり、避難中に必要となる水やトイレを提供したりする協定を県、県警察と締結しました。

**村松さん** 次の世代に震災の記憶をつなぐ、それを風化させないということで様々な課題があると思いますが、いかがでしょうか。

**菊地さん** 我々のセンターが指導する大学の授業として、「災害復興支援学」という総合科目があります。福島大学が10年間、どのような支援活動を県内で行ってきたかを学生に向けて話す授業ですが、これは災害をどう伝えていくかということでもあります。そうした中で学生の間から「知らなかった」という声や段々、大きくなってきているように感じます。当時、小学校低学年だったという子どもたちに加え、今後ますます、そのときに生まれていなかったという子どもたちが入学してくるので、学問的なベースを踏まえながら、それをいかに継続的に伝えていくかが大学に求められていることだと思います。

**青木さん** 非常にわかりにくい、見えにくい原子力災害を含め、3・11に何が起きたのかを知ってもらうことが一番大事な事だと思います。知らないことには一歩も踏み出せない。そのためにはやはり言葉で伝えて、知ってもらうしかない。その意味で、最近、震災の話聞かせてくださいという中学生や小学生が増えていることをすごく嬉しく感じています。私たちの団体の語り人の平均は65歳以上ですが、若い語り人も育てていかなければなりません。私は復興のポイントは人材育成だと思っていて、そのためには、そこに住む一人一人の質の向上、意識の向上が絶対、必要です。また、富岡町はまだ12%が帰宅困難地域のバリエードに囲まれているが、町に住んでいる人の心の中にもバリエードがある。そのバリエードを取り除くことをあきらめてはいけなと思っています。

**諸田さん** パチンコをする、しないにかかわらず、地域の人々が常に集まれる安心・安全な場所を提供し続けることが我々の使命ではないかと考えています。復興に向け、変わるべきもの、変わってはいけないもの、どちらも必要だと思いますが、今後もパチンコホールは地域に深く根付いた地域のコミュニティの場の一つとしてあり続けることが

必要だと思っています。

**芥川さん** 東北の方々は自分の思いを伝えることが若干、苦手ではないかと思いますが、まずは自分の声でお話することが大事です。また、福島県外の人だから何がわかるんだという心のバリアだけは絶対に持ってほしくないと思います。

**村松さん** 最後に、未来へ向けてのメッセージを、それぞれお手元のボードに書いていただけますでしょうか。

**菊地さん** 「同じ被害を繰り返させないために」、私を含めて、それぞれの人がどのような行動ができるか考えたいと思っています。

**青木さん** 「言葉で伝え続ける力で復興への第一歩を踏み出そう」です。私の中では、まだ復興への第一歩はこれからだと思っています。

**諸田さん** 記憶と記録を伝承し、被災された方々の心の豊かさを取り戻すためにも、復興を点から線、そして面へと見える形にしていくために、「継ぐ、繋ぐ、紡ぐ」ことが大事だと思います。

**芥川さん** 「ハートの風船を世界中に飛ばしたい」。ハートの風船を福島から飛ばしてもらいましょう。

**村松さん** 私は、「笑顔でつなぐ心と心」です。まず声を発する、それを周りにいる人が受け止めて、心と心をつないでいく。そうして理解し合って生きていく、支え合って生きていくことが大事だと思います。

### 遊技業界の社会貢献活動を一般社会に継続的に知らしめていく重要性を実感

福島県遊技業協同組合連合会理事長 諸田英模さん

パチンコを身近なレジャーとして、また地域に深く根付いたコミュニティの場として機能させるべく、業態開発を進めることが真の社会貢献ではないかと考え、県民のより身近なところでの防犯、交通安全、社会福祉などの小さな社会貢献を多く積み上げていきたいと思っています。また、広く一般的な媒体を通して広報活動を継続的に行うことで、着実に業界に対する見方が良い方向に変わっていくものと考えています。

